

第51回日本臨床分子形態学会総会・学術集会

2019年9月20日，久留米市

理事長講演

形態学に再結集した令き和やかな 次の半世紀へ

日本臨床分子形態学会

熊本大学大学院生命科学研究部産科婦人科学講座

片淵秀隆

阿蘇根子岳とHale-Bopp彗星
(故兼城雄博士撮影)

顕微鏡の発明

16世紀末 顕微鏡の原型を発明

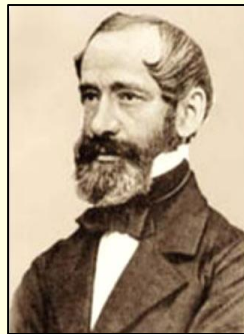
S. Janssen
(1580?~1638?)
オランダ



光学顕微鏡の改良

19世紀末 ツァイス顕微鏡

C.F. Zeiss
(1816-1888)
ドイツ



組織診断技術の確立

ヘマトキシリンによる核染色
エオジンとの重染色の考案
パラフィン包埋法の創出
ミクロトームの開発と薄切標本の作成
標本のホルマリン液固定

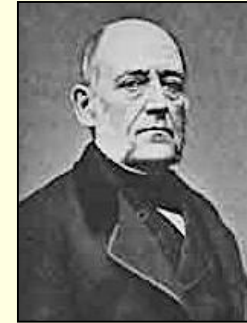
病理解剖学の系統化

19世紀中

1984年に購入した顕微鏡



オリンパス社 BH-2



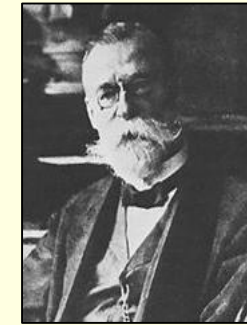
K.F. Rokitansky
(1804~1878)
オーストリア



R.L.K. Virchow
(1821-1902)
ドイツ

外科生検診断 Surgical biopsy

19世紀末 子宮頸癌・体癌
の生検診断



C.A. Ruge
(1846-1926)
ドイツ

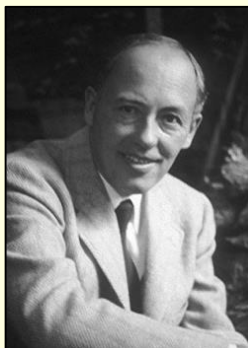


J. Veit
(1852-1917)
ドイツ

外科病理学の夜明け

透過型電子顕微鏡の開発

1931年



M. Knoll
(1897-1969)
ドイツ



E.A.F. Ruska
(1906-1988)
ドイツ

1986年

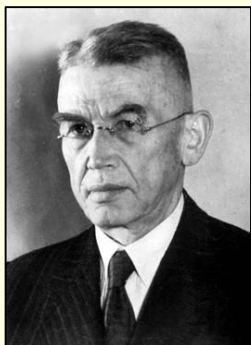
ノーベル物理学賞



HITACHI H-300

磁場の電子線に対する
レンズ作用の証明

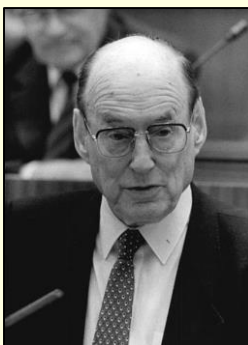
1927年



H. Busch
(1884~1973)
ドイツ

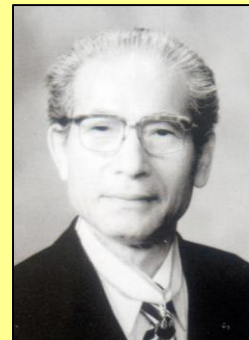
走査型電子顕微鏡の製作

1937年



M. von Ardenne
(1907-1997)
ドイツ

菅田栄治



(1908-1988)
大阪大学教授

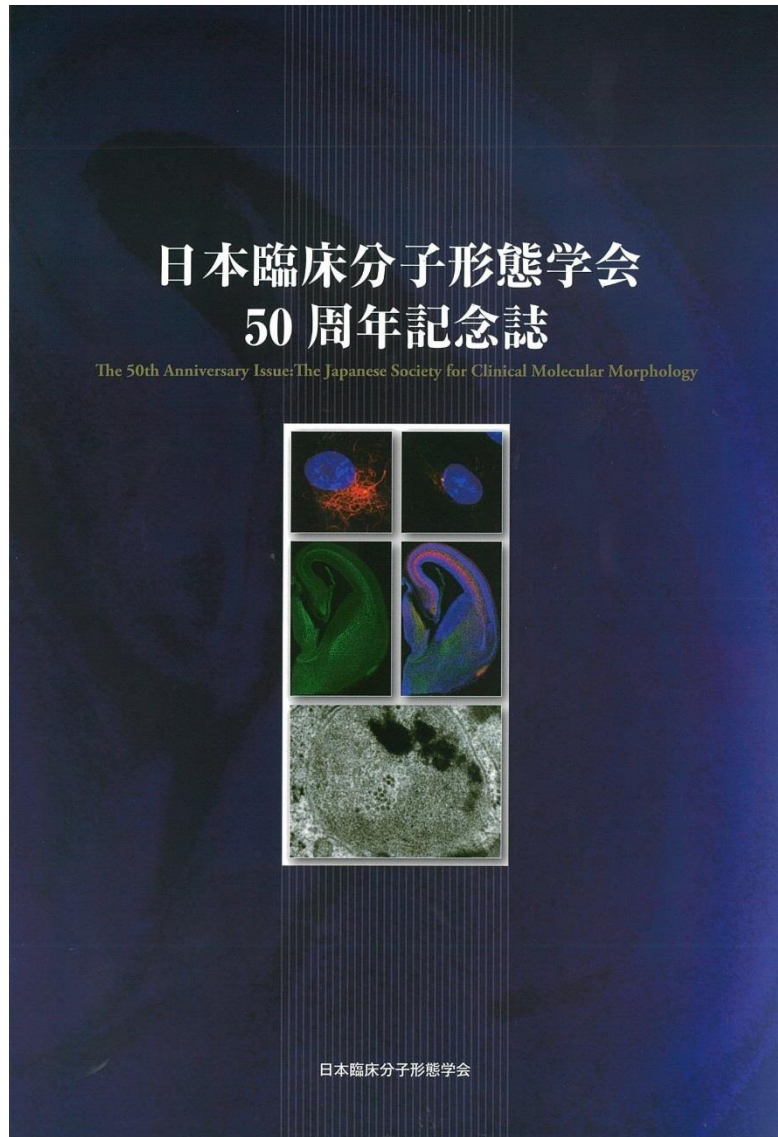
瀬藤象二



(1891-1977)
東京帝国大学教授

菅田は国産第一号、倍率一万倍の電子顕微鏡を完成させ（1940年）、瀬藤は国産化のために学術振興会第37小委員会（電子顕微鏡小委員会）を発足させ（1939年）、やがて日本電子顕微鏡学会の設立に至った（1949年）。

日本臨床分子形態学会50周年記念誌



第4代理事長

向坂 彰太郎教授

(理事長：2012年～2018年)

本学会が創設された過程については、初代理事長の**安澄権八郎先生**をはじめとした創設メンバーによる「日本臨床電子顕微鏡学会創設趣意書」、設立20周年を記念した第2代理事長の**滝 一郎先生**による「日本臨床電子顕微鏡学会20年の歩み」、第3代理事長の**森 道夫先生**による40周年記念講演の中につぶさに述べられている。



(中略) そこで、今回、学会発足50周年を迎え、第4代理事長として本学会の過去の歴史を深く鑑みることにより、新しい時代の中で本学会をどのように発展させていくかについて述べたいと思う。

日本臨床電子顕微鏡学会設立趣意書

高度な分解能を有する電子顕微鏡の応用は医学、殊に形態学の発展に大きな貢献をもたらしつつあります。

最近では形態学以外の分野、すなわち生化学や薬学においても、電子顕微鏡が応用されるようになり、形態学と生化学との領域は著して近接し、極微の形態学知見も生化学的に裏付けられるまでに到っております。このような注目すべき進歩に呼応して、今まで主に基礎医学の進歩発展に寄与した電子顕微鏡は、臨床医学においても欠くことの出来ない重要な利器となりつつあります。

しかし臨床面では、この方面の研究者の学問的な連繋はいまだ無く、お互いが充分に知見を交換し合う場や、組織を持たない現状にあります。このことは電子顕微鏡による臨床医学の研究成果が各方面に正確且つ迅速に認知されることを困難にしており、ひいてはこの方面に関心を持つ人々のアプローチや、啓蒙の機会を失わせていることにもなっております。

このような状況を顧みる時、臨床領域においても早急に電子顕微鏡に関する同好会乃至学会を設置する必要性は明白でありますし、幸いにも、その機運が各方面で盛上っております。ここに有志相諮り、日本臨床電子顕微鏡学会の設立を広く医学の各分野に提唱する次第であります。

本会の目的はいうまでもなく、電子顕微鏡によって臨床医学の諸問題を解明して医学の発展に貢献することにあります。本会の事業としてはこのための研究発表会、機関誌及び文献集の刊行などを行う予定であります。

何卒各位には、本会設立の主旨および事業に理解と賛同を賜り本会に御参加くださるようお願い申し上げます。

昭和 43 年 7 月 20 日

安澄権八郎教授

(理事長：1968年～1983年)

日本臨床電子顕微鏡学会誌 1: 27-31, 1969

日本臨床電子顕微鏡学会の発足に際して



(1906-1984)

日本臨床電子顕微鏡学会会長 安澄権八郎
*President of Clinical Electron Microscopy Society of Japan
Gonpachiro Yasuzumi*

世界各国に電子顕微鏡学会が設立されているが、日本において世界各国に率先して始めた臨床電子顕微鏡学会が誕生したのである。この学会が多く有力な支持者および賛同者を得て、至極円滑に設立されたことは、産婦人科電子顕微鏡同好会を母体として生まれたからであろう。産婦人科電子顕微鏡同好会は1965年4月に発足して、次第に会員を増し、内容を充実しつつあった。この度さらに**汎く臨床医学各科の同学の士（基礎医学を含む）が結集**して、本学会発足の趣意書のような理念のもと

に、臨床電子顕微鏡学会を結成して、お互いに知見を交換して、**組織学的に臨床医学の向上の機会を得る**ようになったことは斯学のため寔に同慶の至りである。

電子顕微鏡においても、基礎医学的応用と臨床医学的応用とは、必ずしもその目的が同じではない。**臨床医学的応用研究においては、基礎医学的知見を基盤として、幅広く応用せんとする傾向がつよい。**臨床電子顕微鏡学会においては、もちろん深遠な研究も望ましいが、本学会においては、**主として広い分野に亘って多数の同学の士が気やすく、謙虚に検討して知見の交換をはからんとするものである。**かくして臨床医学への応用において、**独特の性格を發揮し、また相当の独創的な考えと技術の発展も期待できよう。**

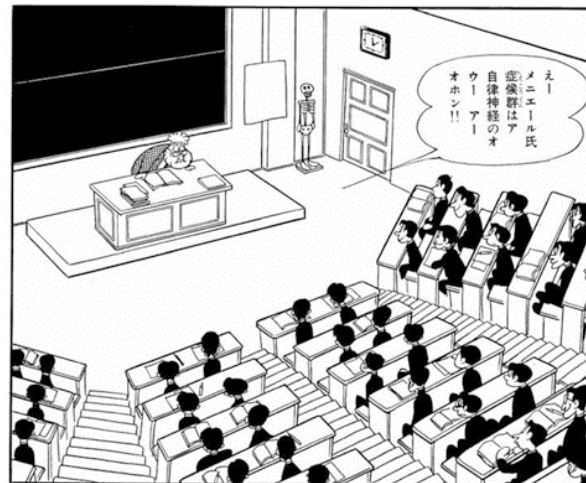
安澄権八郎教授と天才漫画家 手塚治虫



(1928-1989)

1961年、手塚治虫は、奈良県立医科大学で「異型精子細胞における膜構造の電子顕微鏡的研究」で医学博士号を取得した。この研究は、タニシの異型精子の先端を拡大し、各パーツの働きを電子顕微鏡で観察したものである。因みに、この年に東京手塚動画プロダクション（後の虫プロダクション）を設立している。

手塚は 1945年に大阪帝国大学附属医学専門部に入学し、翌年には漫画家としてプロデビューしている。医学部の授業は階段式講堂の一番後ろで、講義を聴きながら漫画を描いていた。学位論文を指導した安澄権八郎教授は『がちゃぼい一代記』に登場する教授のモデルである。



滝 一郎教授

(理事長：1984年～1999年)



(1919-2015)

日本臨床電子顕微鏡学会誌 21 (Suppl.): S1-S25, 1989

日本臨床電子顕微鏡学会20年の歩み

滝 一郎

理事長，大阪警察病院院長

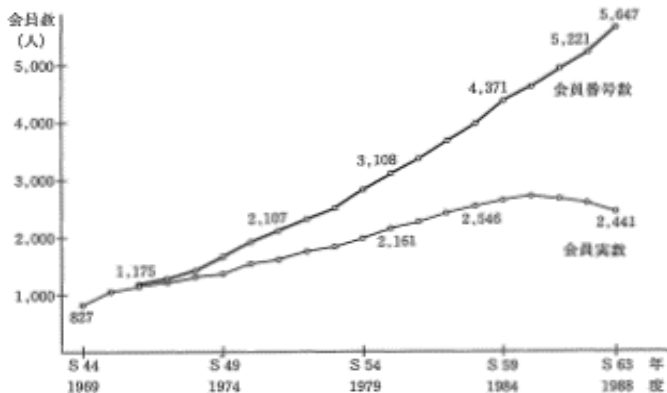
結成当初の会員数は827名と記録されており、その後会員数は次第に増加し、1985年には2,600名を越え、ピークに達している。

学術講演会は、毎年度1回、おおむね9月に行われるのが慣例となっている。一般演題は、第1回学会では85演題が口演された。第14回では、演題数が300にも達した。

学会賞の授与は、第1回学会より行われており、第6回学会よりは、新しく制定された学会賞内規により受賞者が選出され、受賞者はその対象となった研究成果について講演を行うのが恒例となった。第14学会より、学会賞が奨励賞と安澄賞に分けられた。

日本臨床電子顕微鏡学会誌 (Japanese Journal of Clinical Electron Microscopy: JJCEM) は昭和44年2月15日に発刊された。昭和47年には始めて英文が採用され、学会特集号である **Proceeding** も開始となった。昭和48年には学会誌の英文名より Japanese を削除することが決定された。昭和59年度の第17巻より、第1・4号で **英文論文を収録する号** とした。

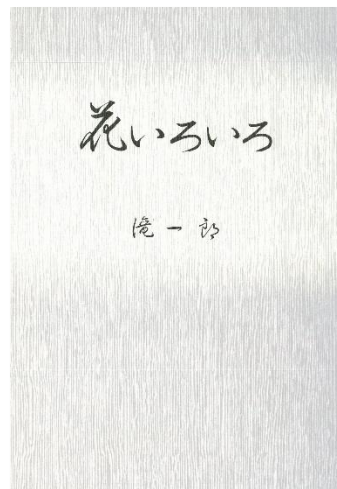
会員数の推移 (1969年～1988年)



滝 一郎教授の粹と多芸多才

1941年に大阪帝国大学医学部を卒業後は母校の**病理学**副手となった。翌年には、**海軍軍医中尉**として海軍基地で訓練を受け、戦艦長門の軍医を務め、1943年には**海軍軍医大尉**として第2次世界大戦ではマーシャル群島のミレー島に駐屯したが、生き残り、復員した。1952年には**病理学講師**に昇進したが、1956年には産科婦人科学に移籍した。1968年に**九州大学医学部婦人科産科学教授**に就任、1981年には大阪警察病院院長の職に就いた。

長唄が特に気に入った趣味で、幼馴染に長唄三味線奏者の杵屋勝禄師匠がいたことから稽古をつけてもらい、定期的に発表会で歌うことをしていた。手を動かすことが好きで**プラモデル**などの模型製作、模型時代が過ぎると**野生花木の水彩画**、気に入ったものを選択して2冊自費出版した。さらに、**85歳**で「**形態と機能の相関性・一体性**」を実証した『**婦人科腫瘍の臨床病理**』を出版した。



(京都医療センター 小西郁生院長より供与)

森 道夫教授

(理事長：2000年～2011年)



(1935-2015)

第40回日本臨床電子顕微鏡学会総会・学術講演会 48, 2008
(イブニング特別企画40周年特別記念講演)

日本臨床電子顕微鏡学会から日本臨床分子形態学会への40年を振り返って

森 道夫

日本臨床分子形態学会 理事長

20世紀最大の発見と言われるWatsonとClickのDNA二重らせん構造がScience誌に発表されたのが1953年、ノーベル賞が1962年であるから、この学会が発足した頃、すでに分子生物学が起きていたことになる。その波はやがて大きなうねりとなり、最新の研究手段だった電顕も試練の時を迎えた。

試練を乗り切るには学会の体制を改める必要があり、活動の downsizing や経費削減に努め、学会財政の立て直しを進めた。

英文誌の誕生と強化 1993年に英文号を独立させ、**Medical Electron Microscopy (MEM)**のA4版にし、年4冊を発行した。1996年にMEMの発行を学会センターから**Springer**に移し**国際化**を図った。2000年にIndex Medicusに収録された。

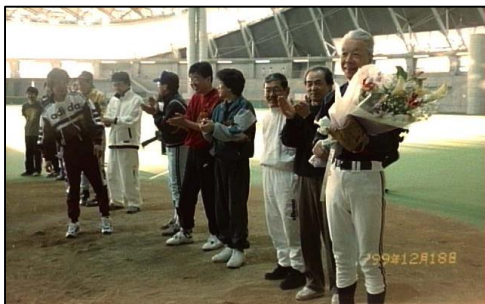
臨床電子顕微鏡学会から臨床分子形態学会へ 電子顕微鏡の他にもレーザー顕微鏡やimmunohistochemistryなどの広い範囲の形態学の論文に枠を広げ、英文誌を確保するために、2004年に学会名称を**日本臨床分子形態学会**へ変更し、英文誌の名称も**Medical Molecular Morphology (MMM)**に変更した。

野球とビールを愛した森 道夫教授

1961年に札幌医科大学を卒業後は、内科医を目指して関東逹信病院でインターンをしていた。その時の抄読会で小器官病理学に啓発され、Uターンして母校の病理学で研究を開始、電子顕微鏡病理学に熱中した。

1974年にAlbert Einstein医科大学に留学、ライソソームのダイナミズムやゴルジ装置の細胞生物学、組織化学による細胞小器官の可視化等を学んだ。帰国後は細胞骨格の機能病理学に守備範囲を広げ、1982年に教授に就任した。

野球とビールをこよなく愛し、1999年、65歳での森投手引退試合でも球の速さは衰えていなかった。



(札幌医科大学産婦人科 齋藤 豪教授より供与)

日本臨床分子形態学会会則 第4条

事業

本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

第1項 学術集会を適時開催する。

第2項 英文学会機関誌 *Medical Molecular Morphology* を発行する。

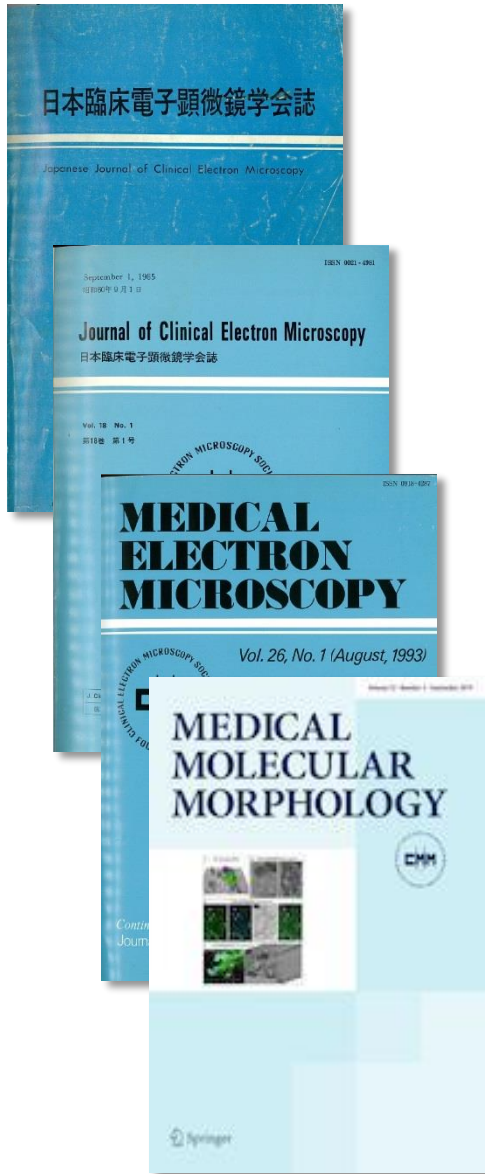
第3項 その他目的達成に必要な事業を行い、会員相互の連繋及び知見の交換をはかる。

学術集会の開催

回	年度	会長	所属(役職:教授)	会期	会場
1	1969	安澄 権八郎	奈良県立医科大学解剖学教室	1969.9.14-15	奈良県立医科大学講堂
2	1970	沢崎 千秋	日本大学医学部産婦人科学教室	1970.9.14-15	国立教育会館
3	1971	松村 忠樹	関西医科大学小児科学教室	1971.8.21-22	大阪厚生年金会館
4	1972	藤田 英輔	山口大学医学部皮膚科学教室	1972.9.9-10	山口県民会館
5	1973	黒住 一昌	群馬大学内分泌研究所形態部	1973.8.29-31	群馬県民会館
6	1974	千田 信行	大阪府立成人病センター	1974.9.12-14	大阪府立青少年会館
7	1975	滝 一郎	九州大学医学部産婦人科学教室	1975.9.19-20	福岡市民会館
8	1976	上田 文男	愛知医科大学整形外科教室	1976.9.17-18	名古屋市民会館
9	1977	橋本 正淑	札幌医科大学産婦人科学教室	1977.9.16-17	札幌市医師会館
10	1978	森安 信雄	日本大学医学部脳神経外科学教室	1978.9.8-10	国立教育会館
11	1979	三島 豊	神戸大学医学部皮膚科学教室	1979.9.18-19	神戸文化ホール
12	1980	中村 恒男	滋賀医科大学	1980.8.29-31	大津市民会館
13	1981	谷川 久一	久留米大学医学部第二内科学教室	1981.9.18-19	石橋文化センター
14	1982	坂口 弘	慶應義塾大学医学部病理学教室	1982.9.16-18	日本都市センター
15	1983	市田 文弘	新潟大学医学部第三内科学教室	1983.9.16-18	新潟県民会館
16	1984	樺木 勇	関西医科大学産婦人科学教室	1984.9.20-22	大阪商工会議所
17	1985	渡 仲三	名古屋市立大学医学部第一解剖学教室	1985.9.26-28	名古屋公会堂
18	1986	吉田 吉信	滋賀医科大学産婦人科学教室	1986.10.25-26	京都府立労働会館京商工会議所
19	1987	奥田 稔	日本医科大学耳鼻咽喉科学教室	1987.9.17-19	日本都市センター
20	1988	山元 寅男	九州大学医学部第一解剖学教室	1988.9.1-3	県立福岡勤労青少年文化センター
21	1989	廣畑 和志	神戸大学医学部整形外科教室	1989.9.20-22	神戸国際会議場
22	1990	岡田 慶夫	滋賀医科大学	1990.9.19-21	大津プリンスホテル

23	1991	佐々木 博	富山医科薬科大学	1991.9.12-14	富山県民会館
24	1992	太田 善介	岡山大学医学部第三内科学教室	1992.9.17-19	岡山衛生会館
25	1993	永田 哲士	信州大学医学部第一解剖学教室	1993.9.28-30	松本文化会館
26	1994	緒方 卓郎	高知医科大学第一外科学教室	1994.10.5-7	高知県民文化ホール
27	1995	大澤 源吾	川崎医科大学内科学(腎)	1995.9.28-30	倉敷市芸文館
28	1996	河村 慧四郎	大阪医科大学第三内科学教室	1996.10.17-19	千里ライフサイエンスセンター
29	1997	森 道夫	札幌医科大学第二病理学教室	1997.10.2-3	札幌市教育文化会館
30	1998	中井 康光	昭和大学医学部第一解剖学教室	1998.9.17-19	品川区立総合区民会館
31	1999	中村 三郎	日本大学医学部脳神経外科学教室	1999.11.17-19	日本大会館 アルカディア市ヶ谷
32	2000	藤本 淳	産業医科大学医学部第二解剖学教室	2000.9.28-30	北九州国際会議場
33	2001	雨宮 次生	長崎大学医学部眼科教室	2001.9.27-29	長崎ブリックホール
34	2002	工藤 隆一	札幌医科大学医学部産婦人科学教室	2002.9.27-28	かでる2・7
35	2003	畑 俊夫	埼玉医科大学産婦人科学教室	2003.10.29-31	文京シビックホール
36	2004	岡村 均	熊本大学医学部薬学研究所先端生命医療科学部門育成再建・移植医学講座産科学分野	2004.11.5-6	ニュースカイホテル
37	2005	河本 圭司	関西医科大学脳神経外科	2005.9.30-10.1	大阪国際交流センター
38	2006	石原 得博	山口大学医学部 構造制御病態学講座	2006.9.29-30	宇部市文化会館
39	2007	大野 伸一	山梨大学大学院医学工学総合研究部解剖分子組織学教室	2007.9.28-29	甲府市総合市民会館
40	2008	向坂 彰太郎	福岡大学医学部消化器内科	2008.10.3-4	福岡国際会議場
41	2009	塚良 愛郎	関西医科大学病理学第二講座	2009.9.4-5	神戸国際会議場
42	2010	市田 隆文	順天堂大学医学部附属静岡病院 消化器内科	2010.9.24-25	東レ総合研修センター
43	2011	大槻 勝紀	大阪医科大学生命科学講座解剖学教室	2011.9.9-10	大阪医科大学
44	2012	小林 道也	高知大学医学部医療学講座医療管理学分野	2012.9.28-29	高知市文化プラザかるぼーと
45	2013	上野 隆登	朝倉医師会病院	2013.9.13-14	アクロス福岡
46	2014	根本 則道	日本大学医学部病態病理学系病理学分野	2014.10.17-18	TKP 市ヶ谷カンファレンスセンター
47	2015	小路 武彦	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科医療科学専攻 生命医学講座 組織細胞生物学分野	2015.9.18-19	長崎大学医学部良順会館・ボンベ会館
48	2016	片淵 秀隆	熊本大学大学院生命科学研究部 産科婦人科学分野	2016.9.23-24	くまもと県民交流館バレア
49	2017	千田 隆夫	岐阜大学大学院医学系研究科 病態制御学講座解剖学分野	2017.9.15-16	じゅうろくプラザ
50	2018	中村 正彦	北里大学薬学部臨床薬学研究・教育センター 病態解析学	2018.9.7-8	北里大学大村記念ホール

学会誌の発行



日本臨床電子顕微鏡学会誌

- 1968(S43) 日本臨床電子顕微鏡学会発足
Clinical Electron Microscopy Society of Japan
- 1969.2(S44) 日本臨床電子顕微鏡学会誌(和文誌年2冊)第1巻第1号を創刊
Japanese Journal of Clinical Electron Microscopy; JJCEM(S48からJapaneseを取る)
- 1985(S60) 和文号(年2冊)英文号(年2冊)抄録号1冊の5冊を発行
- 1993(H5) 英文号を独立発行(年4冊)
Medical Electron Microscopy (Med Electron Microsc:MEM)
- 1996(H8) MEM誌をSpringerから発行
- 1997(H9)| MEM誌の電子ジャーナル化(Vol.32 No.1～)
- 2000(H12) Index Medicusに収録
- 2001(H13) 和文誌(第33巻2号)廃刊

日本臨床分子形態学会誌

- 2004.11(H16) 学会名を日本臨床分子形態学会に変更
Japanese Society for Clinical Molecular Morphology
- 2005(H17) 学会誌名 Medical Molecular Morphology (Med Mol Morphol: MMM;Vol.38～)に変更
- 2013.1(H25) Online Firstの導入
- 2015.1(H27) Editorial Managerの導入
- 現在 Impact Factor1.217 を得ている

英文抄録集

ISSN 0021-4981

September 1, 1985

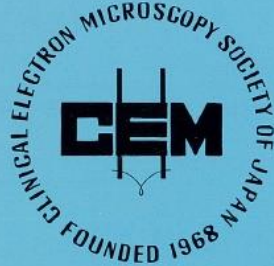
昭和60年9月1日

Journal of Clinical Electron Microscopy

日本臨床電子顕微鏡学会誌

Vol. 18 No. 1

第18巻 第1号



CLINICAL ELECTRON MICROSCOPY
SOCIETY OF JAPAN

日本臨床電子顕微鏡学会

J. Clin. Electron Microscopy

臨床電顕誌

656

TWENTY-FOURTH ANNUAL MEETING

SMALL CELL CARCINOMA OF THE UTERINE CERVIX: ULTRASTRUCTURAL STUDY OF PRIMARY AND XENOGRAPIC TUMORS

Hironori YASUIRO, Yoshito SUENAGA, Akihito OHSWIGE, Hiroshi MIYAZAKI, Tadatoshi FURUMATSU, Hidetaka KATAYUCHI and Hideoh OAMURA

Department of Obstetrics and Gynecology, Kumamoto University School of Medicine, 1-1-1 Honjo, Kumamoto 860, JAPAN

Small tumor cells in carcinoma of the uterine cervix involve small cell non-keratinizing type squamous cell carcinoma, carcinosarcoma, undifferentiated carcinoma, or malignant lymphoma. The present study was undertaken to clarify the histogenesis of undifferentiated carcinoma using a primary tumor and xenographic tumors (passages 1, 2 and 3) by immunohistochemical and electron microscopic examinations.

Material and Methods

A 28-year-old woman, gravida 1, para 1, was admitted to our hospital with complaint of abnormal vaginal bleeding. On physical, laboratory and radiological investigations, the patient had a FIGO stage IIB, undifferentiated carcinoma with elevated levels of ACTH in the serum. The cervical tumor was cytologic and bled easily. She underwent radical hysterectomy, pelvic lymphadenectomy, and paraaortic lymphadenectomy (pT2aN0M0). The patient was subsequently treated with 3 courses of intravenous chemotherapy (VP-16, CDDP and PEP). However, she developed recurrent tumor on the vaginal stump. Although she also had 56Gy of external radiation to the whole pelvis and intravenous chemotherapy (CDDP and 254-S, etc.), she died 20 months after initial therapy.

Tumor specimens from the recurrent lesion of the vaginal stump were placed in a Petri dish, and necrotic tissue and normal tissue were separated from tumor tissue mechanically. Tumor tissue (10-Cm³) was washed and sliced in RPMI medium. Tumor pieces in RPMI were injected subcutaneously into the flank area of nude mice (BALB/c/nu/nu). Animals were sacrificed once tumors had reached a volume of 1-5cm³. Tumor tissues were removed aseptically and serially transplanted in pieces as described.

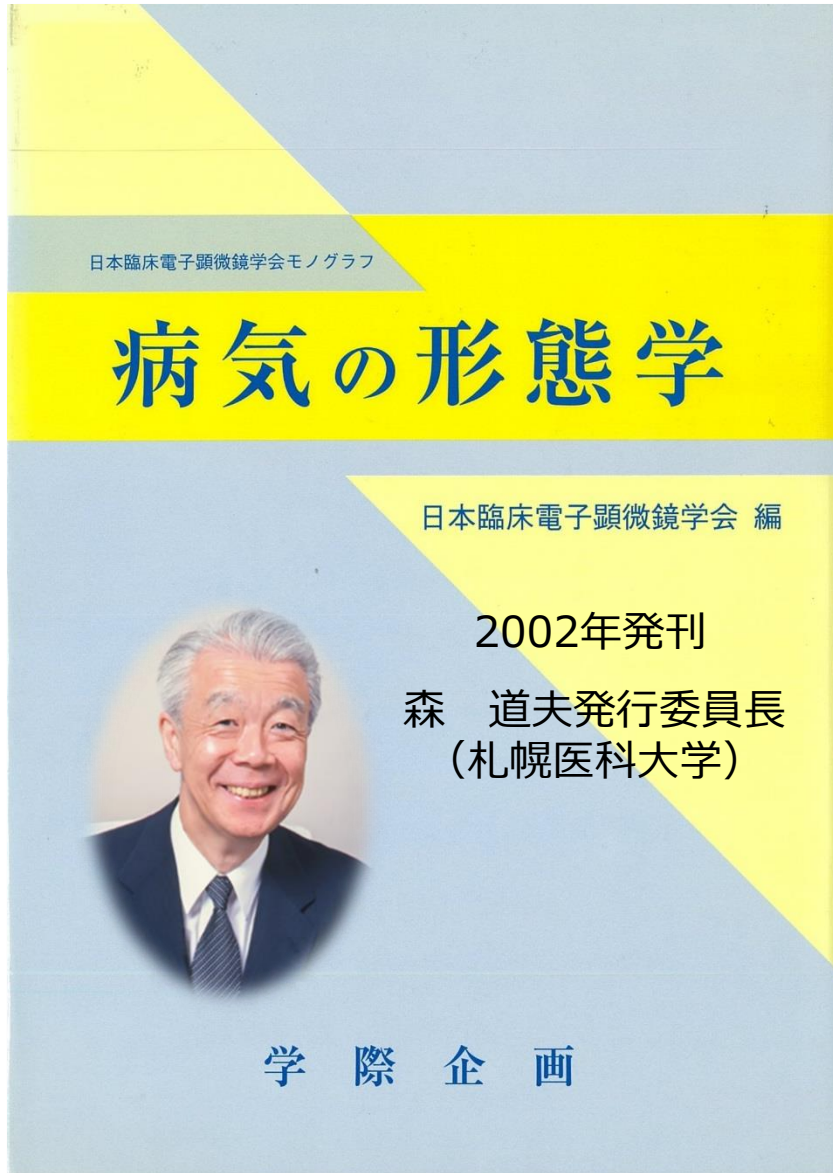
Tumor tissues were obtained from the primary tumor and xenographic tumor (passage 1-3). These tumors were submitted to light microscopy (hematoxylin and Eosin, Grimelius, and Toluidine blue stains), immunohistochemistry (ACTH and Keratin) and transmitted electron microscopy.

Results

Tumor cells of primary lesion were light-microscopically characterized by sheets of closely packed cells. The tumor cells were uniformly small and round, and had hyperchromatic nuclei and scant cytoplasm (Fig.1). Although occasional ribbon-like formations could be identified, tumor cells were negative for Grimelius stain and ACTH positive cells were not detected immunohistochemically. Ultrastructurally, the tumor cells were small with desmosome-like junction, and had a high nucleo-cytoplasmic ratio. The nuclei were round or irregular shaped with heterochromatin. The intracellular organelles were poorly developed (Fig.2). A few tumor cells had relatively rich cytoplasm with neurosecretory granules (Fig.3a), or small bundles of filaments (Fig.3b).

The xenographic tumor (passage 1) was mixed with clear cells and dark cells without any characteristic structure. Ultrastructurally, both cells were small, and had a high ratio of nucleo-cytoplasmic ratio. The nuclei were round or ovoid with euchromatin. Electron-microscopically both cell types had no apparent differences. In the second passage, relatively frequent ribbon-like structures composed of dark cells were observed. Ultrastructurally, the larger cells with rich organelles and euchromatin were different from the small cells with scant cytoplasm and poorly developed organelles. In the third passage, it was observed that the clear cells were gradually changed to dark cells in stratification. The clear cells had ovoid

刊行誌



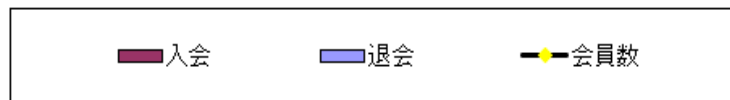
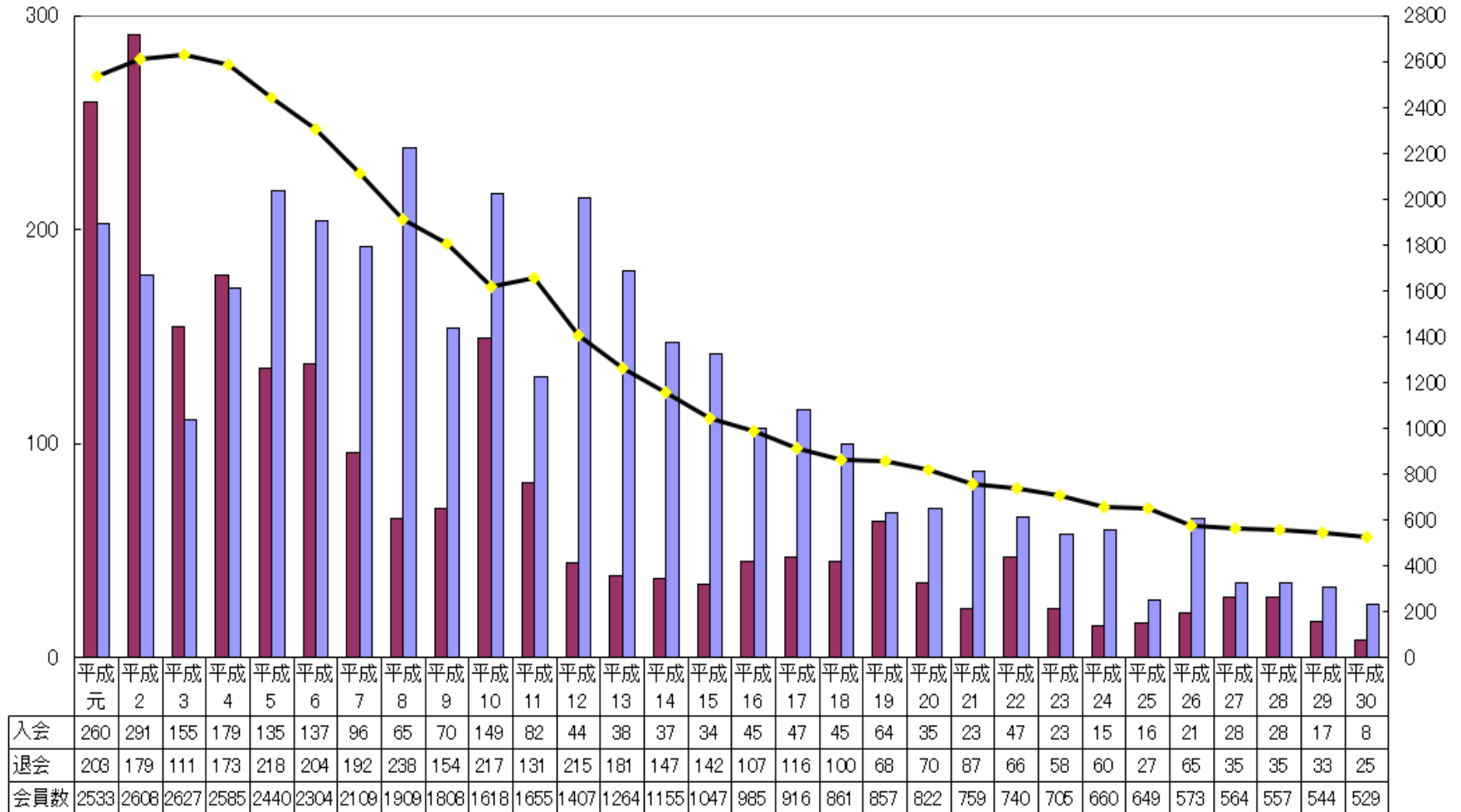
日本臨床分子形態学会会則 第5条

会員 種別及び資格

本会の会員の種別及び資格は次のとおりとする。正会員は、本会の目的に賛同する総てのもの及び機関で所定の会費を納入したものとす。賛助会員は、本会の目的・事業を賛助する法人・個人及び団体とし、所定の会費を納入したものとす。名誉会員は本会に特に功労のあったもので、理事会の推薦により評議員会の議を経て、総会の承認を受けて理事長がこれを推戴する。功労会員は、本会に功労のあったもので、理事会の推薦により評議員会の議を経て、総会の承認を受けて理事長がこれを推戴する。なお、名誉会員及び功労会員に推薦については別に定める。本会の会員であった外国人留学生が帰国後、外国人会員（年会費無料）を申請する場合には、理事会の承認を得なければならない。

会員数の推移

(1989~2018年)



年代別・部門別の会員数

年代・男女別

臨床部門

基礎部門

生年代	男	女	計
1920年代	4		4
1930年代	32	1	33
1940年代	51	3	54
1950年代	96	11	107
1960年代	90	10	100
1970年代	57	18	75
1980年代	24	11	35
1990年代	6	2	8
			0
			0
生年月日登録無し	79	11	90
			506
賛助・教室・図書館			23
全会員数			529

科	男	女	計
内科	91	8	99
外科	48	1	49
小児科	4	0	4
精神科	2	0	2
脳外科	16	0	16
整形外科	8	0	8
皮膚科	20	6	26
眼科	4	3	7
耳鼻咽喉科・頭頸部科	1	0	1
産婦人科	48	10	58
放射線科	1	0	1
麻酔科	1	0	1
歯科・口腔外科	0	0	0
その他臨床	2	1	3
	246	29	275

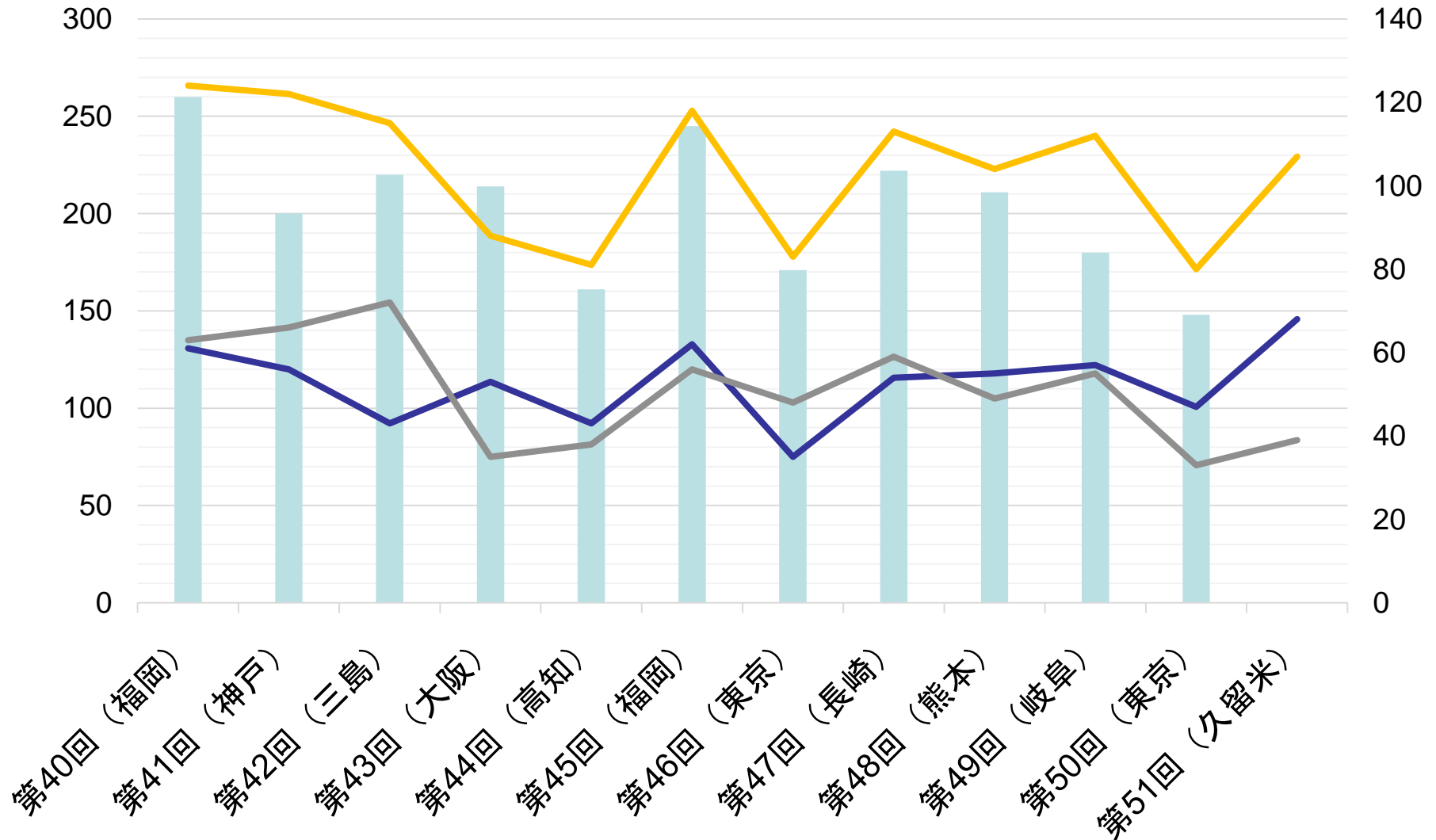
科	男	女	計
臨床検査科	6	2	8
解剖	59	8	67
生理	0	0	0
細胞生物学	12	5	17
分子生物学	4	2	6
生命科学	2	1	3
獣医学部	0	0	0
生化学	3	0	3
病理	84	10	94
薬学	6	0	6
細菌・微生物	6	3	9
その他基礎	9	2	11
電顕技術科	12	4	16
	203	37	240

(2018年度の解析)

学術集会の参加者数と演題数

(2008年～2019年)

参加者数 一般演題 特別講演など 総演題数



第51回学術集会における一般演題数



トップ5施設		
1	久留米大学	10
2	熊本大学	8
3	札幌医科大学	6
4	埼玉医科大学	5
5	大阪国際がんセンター	3
	福島県立医科大学	3
	愛知県医療療育総合センター	3
	帝京大学	3

トップ5講座		
1	熊本大学産科婦人科	5
2	久留米大学内科	4
3	久留米大学病理	3
	愛知県医療療育総合センター	3
	札幌医科大学フロンティア	3

日本臨床分子形態学会会則 第15条

理事長、副理事長及び理事の職務

理事長は本会の事務運営を掌理し、**理事**は理事会を組織し、会則に定める事項及びその他本会の運営事項を議決し、これを遂行する。

副理事長は、理事長の職務を補佐する。

理事会に**庶務、財務、編集、学術、広報、長期計画**のための委員会を常置し、担当常任理事各1名が委員長として各委員会を総括し、必要に応じて**副委員長**1名を置くことができる。

委員会には理事若干名を委員として置き、委員長の指示のもとで業務を分担する。また、事務運営を円滑に進めるために、**幹事長1名と各委員会に幹事1名ずつ**を置くことができる。

理事長は**幹事長**1名を、**各委員長**は**幹事**1名を、**会員**から指名し選任することができる。



片淵秀隆理事長



小路武彦副理事長



本原剛志幹事長

令和元年度理事会

理事 片瀨秀隆, 小路武彦, 小林道也, 原田 大, 齋藤 豪, 千田隆夫, 矢野博久
田代浩徳, 永田浩一, 鳥村拓司, 森谷卓也, 梶原 健, 北岡 隆, 大野伸彦
古賀浩徳, 進 伸幸, 高木孝士, 竹花泰雄, 鶴田大輔, 中西陽子, 奈須家栄
原田憲一, 菱川善隆

監事 笹野公伸, 竹腰 進

幹事 本原剛志, 並川 努, 本間雄一, 真里谷奨, 山本直樹, 内藤嘉紀, 柴田恭明



庶務委員会



小林道也委員長



田代浩徳副委員長



並川 努幹事

委員長 小林道也

副委員長 田代浩徳

幹事 並川 努

委員 進 伸幸, 竹花泰雄, 鳥村拓司, 永田 浩一, 森谷卓也

学会会則および内規を整理・改正し、これに則って学会運営を円滑に進めていく。

委員会の経緯

1968年の発足時は沢崎千秋理事（日本医科大学産婦人科）ならびに鈴木諄三理事（東京大学電子顕微鏡総合研究室、歌人）によって担当された。過去20年間は、河本圭司理事、円山英昭理事、大野伸一理事、上野隆登理事、片渕秀隆理事、2019年からは小林道也理事が担当している。

主な職務

1. 会員の入会ならびに退会の管理を行い、学会会員数の動向を把握する。
2. 会則・内規に則って役員、名誉会員ならびに功労会員を専任する。
3. 会費の金額や徴収方法をはじめとした学会運営上の円滑化を検討する。

過去1年間の案件

1. **会則・役員選出規定・内規の改正**
 - ・ **功労会員**推薦規定に関する審議ならびに改定案作成
 - ・ **幹事**推薦に関する会則改定案作成
 - ・ **副理事長**ならびに**委員長、副委員長**の選出規定案作成
 - ・ **理事**の補充に関する役員選出規定の改定案作成
 - ・ **監事**選出に関する内規の改定案作成
2. 他学会の後援、協賛、共催に関する内規作成
3. 外国人会員推薦に関する申し送り事項作成
4. 弔事における申し送り事項作成
5. 会費徴収方法の検討

財務委員会



原田 大委員長



永田浩一副委員長



本間雄一幹事

委員長 原田 大

副委員長 永田浩一

幹事 本間雄一

委員 梶原 健、斎藤 豪、矢野博久、鶴田大輔

2014年（第45学会年度）の理事会にて名称が会計委員会から財務委員会へ変更された。

委員会の現状と問題点

1. 向坂彰太郎前理事長の下、緊縮財政と予算・決算の効率化を図った。
2. 現在は、会員年会費、機関誌刊行収入、創設時からの継続且つ一環した本学会の学術活動へのキッセイ薬品(株)からの支援、前年度の繰越金を併せて約3,000万円の収入と約1,000万円の支出で運営している。
3. その他に、本学会の財産として、入会金1,000円の蓄積による約700万円の基本金会計がある。
4. 総会・学術講演会の担当施設への補助として、基礎系には150万円、臨床系には100万円の補助を行っている。
5. 会員の減少により年会費による収入が漸減している。
6. 総会・学術講演会への企業などの協賛が減少し、学会運営の見直しが必要である。
7. 総会・学術講演会の参加費ならびに懇親会費の見直しを検討中である。
8. 会員年会費の変更について検討中である。
9. 機関誌への論文掲載料の変更について検討中である。

学術委員会



齋藤 豪委員長



鳥村拓司副委員長



真里谷 奨幹事

委員長

齋藤 豪

副委員長

鳥村拓司

幹事

真里谷奨

委員

大野 伸彦, 高木 孝士, 田代 浩徳, 原田 憲一, 菱川 善隆

分子形態学を基盤とした「臨床医学」と「基礎医学」の
架け橋となるように、分野に囚われず広く学術活動を奨
励・推進する。

日本臨床分子形態学会賞

安澄記念賞

学会賞に関する内規

- 第1条 会則第4条第3項の趣旨に従い、**学会の進歩発展に寄与した学会員**に安澄記念賞を授与する。
- 第2条 安澄記念賞は**理事長推薦**により、理事会、評議員会の議を経て総会にて決定する。

奨励賞

学会賞に関する内規

- 第1条 会則第4条第3項の趣旨に従い、**学術奨励のために優秀な成績を収めた学会員**に奨励賞を授与する。
- 第3条 前年度までに刊行された本学会員による医学領域の分子形態学的研究において、**顕著な成果をあげた学会員**に授与される。
- 第5条 審査委員会は毎年所定の時期に奨励賞候補者の**募集**を公告するものとし、**(中略) 奨励賞候補者の業績の中に少なくとも1編は本学会誌に掲載されたものであることが望ましい。**
尚、募集では、対象を49歳以下、会員歴を5年以上とする。
- 第10条 奨励賞を受賞した者は、当該年度の本学会総会学術講演会において、受賞対象となった研究を中心として**受賞講演**を行うものとする。

日本臨床分子形態学会論文賞

論文賞に関する内規

第3条 本賞は学会機関誌 **MMM**に掲載された前年度論文の中から、学術上または技術上特に優秀な論文数編を編集者が選び、**評議員から推薦のあった論文も加え**、1～2編を学会賞審査委員会が決定し、**学会員著者全員**に対し毎年1回授与する。



日本臨床分子形態学会 High Citation Award

日本臨床分子形態学会High Citation Awardに関する内規

第2条 本Awardは、**直前の2年間の機関誌 MMM掲載論文の中でもっとも引用数の多いHigh Citation論文の筆頭著者**に、毎年1回授与する。

学術集会最優秀演題賞ならびに優秀演題賞

学術集会最優秀演題賞ならびに優秀演題賞内規

第1条 本会は奨学ならびに若手研究者育成のため、一般演題から最優秀演題賞1名ならびに優秀演題賞2名以内を設け、本内規によって授与する。

第4条 本賞は学術集会期間中に**会長より授与**される。

第5条 編集委員会は、**受賞演題を学会誌 (MMM) へ投稿**するよう依頼する。

編集委員会



千田隆夫委員長



森谷卓也副委員長



山本直樹幹事

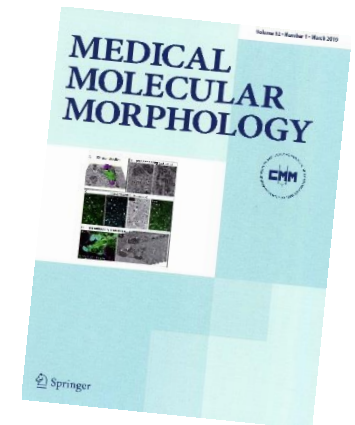
委員長 千田隆夫
副委員長 森谷卓也
幹事 山本直樹
委員 大野伸彦、梶原 健、古賀浩徳、小路武彦、中西陽子
原田憲一

大野伸彦、梶原 健、古賀浩徳、小路武彦、中西陽子

Medical Molecular Morphology (MMM)

Editor-in-Chief: Takao Senda

Editorial Board: Kenichi Harada, Mitsuhiro Hasegawa
Takeshi Kajihara, Hironori Koga
Takehiko Koji, Takuya Moriya
Yoko Nakanishi, Nobuhiko Ohno
Akihiro Tojo, Naoki Yamamoto



MMM誌に至るまでの経緯

- 1969年 Japanese Journal of Clinical Electron Microscopy (JJCEM)を創刊
- 1993年 Medical Electron Microscopy (MEM)に改名
- 1996年 Springer社から発行
- 1997年 電子ジャーナル化
- 2005年 Medical Molecular Morphology (MMM)に改名
- 2015年 Editorial Managerの導入

MMM誌の特徴と現状

1. 形態学(光顕、電顕、共焦点レーザー等)を主たる解析手法とする研究
2. 医学・生物学の幅広い領域の論文を掲載
3. 分子レベルで生命現象や病態を解析する研究も歓迎
4. 論文種別: 総説、原著、症例報告、レター
5. 2020年より掲載料無料化を予定
本学会会員が筆頭著者である論文に限定
6. 国際的なSpringer社による高品質な印刷、カラー写真の無料
年に4号を発行、1巻の総ページ数は240ページ
7. 投稿論文数が年々増加し、それに伴ってアクセプト率が年々低下(難化)
2018年(51巻)の総投稿数は89編(総説 17、原著 65、症例 6、レター 1)
アクセプト34編、リジェクト54編(アクセプト率:38%)
8. 論文受理からアクセプトまでが迅速化(日数:78日)
9. 近々License to Publishに移行予定で、論文のCopyrightは著者に帰属

MMM誌の今後の課題

1. 投稿論文数の増加に伴う負の側面

- ・ 査読依頼が断わられることが多く、特定の査読者に依頼が集中している。
会則では、本会理事・監事・評議員は査読の依頼を受ける義務がある。
- ・ 海外からの投稿も増加しているが、本誌のスコープに合わない論文が多い。
- ・ 海外からの投稿者（非会員）に、掲載後に掲載料を支払わない場合がある。

2. インパクト・ファクター（IF）を上げる方策

2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
1.536	1.297	1.513	1.388	1.171	1.070	1.464	1.471	1.210	1.217

2018年は1.383です。

- ・ 掲載されたMMM誌論文を2年以内に積極的に引用する（現在は6%）。
- ・ 理事・監事・評議員がMMM誌論文を年1回引用するだけでIFは5.0になる。
- ・ 総説は原著や症例報告よりも頻繁に引用され、IF向上に貢献する。

毎号1編以上の総説を掲載する方針で、総説の投稿を歓迎、学術集会での優れた発表に総説執筆を依頼、若手研究者にも総説執筆を依頼している。

3. MMM誌を活用して会員の増加

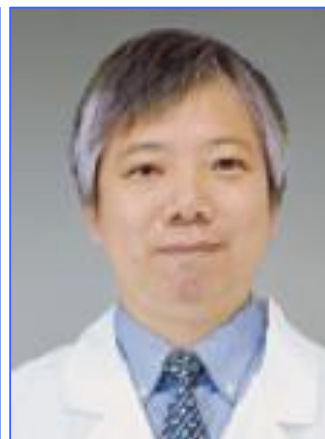
- ・ 数少ない“形態学専門誌”としての独自性維持し、多くの形態学研究者の投稿を歓迎する。
- ・ 会員になれば掲載料が無料になる（年会費は掲載料よりも安い）
- ・ アクセプトまでの日数が短いので、学位論文の投稿先に最適である。

投稿前に会員になれば迅速な審査を保証する。

広報委員会



矢野博久委員長



梶原 健副委員長



内藤嘉紀幹事

委員長 矢野博久

副委員長 梶原 健

幹 事 内藤嘉紀

委 員 小林道也, 竹花泰雄, 田代浩徳, 中西陽子, 奈須家栄
菱川善隆

日本臨床分子形態学会のホームページを通じた広報活動、
会報に掲載する記事の執筆依頼、会報の作成、そしてメール
による会報の配信などを行っている。

委員会の職務

1. ホームページの内容の充実、更新と管理

- ・現在の掲載内容：理事長挨拶、学会からのお知らせ、次期学術集会のお知らせ、過去の学術集会の紹介、機関誌MMMに関する情報紹介、広報委員会からのお知らせ、会報の掲載、役員一覧、学会賞受賞者一覧、歴代理事長一覧、歴代学会長一覧、入会案内・会則紹介、関連学会の紹介など
- ・今後の予定：会員の問い合わせ窓口・掲示板の設置を検討、会報のアーカイブ化など

2. 会報の定期発行

- ・現状：会報44、45、46を順調に発行
- ・今後の予定：年間3回の発行

3. メールアドレスの登録の推進

- ・現状：2018年6月1日現在で、会員の529名中434名（82%）、評議員の129名中103名（80%）が登録
- ・今後の予定：会員や会員以外にも学術集会参加受付でメールアドレスの登録を依頼し、会報の配信、抄録の応募のお願いなどに活用

4. その他

- ・Facebookに関しては、中村正彦前委員長に引き続き管理を委託（個人アカウントのため）
- ・学術集会の抄録応募期間の延長など学術集会運営に関する事項は、広報委員会ではなく、学術集会会長に一任する

会報の内容と配信の予定

会報を年に3回発行していく。また、掲載内容に関しては、現時点では下記の内容を検討している。

1. 春（3月）号

- 奨励賞、論文賞の募集のお知らせ
- 前年度の奨励賞、論文賞の受賞者の紹介と受賞者による受賞研究内容などの紹介
- 次期学術集会の概要や演題募集に関してのお知らせ

2. 夏（8月）号

- 次期学術集会会長の直前の学術集会に関する案内と会長の所属する研究室の紹介
今年度の研究室紹介は、広報委員長の研究室を紹介
- 本学会所属の研究者の紹介

3. 冬（12月）号

- 学術集会を終えた学術集会長の報告
- 次期学術集会会長の挨拶
- 本学会所属の研究者の研究室の紹介
2019年度は梶原健理事に依頼
- 本学会所属の研究者の紹介

+

新理事長紹介
新理事の紹介
新評議員紹介
会員の声
関係学会の情報
などの内容もタイムリーに掲載



久留米大学病理
(矢野博久教授)

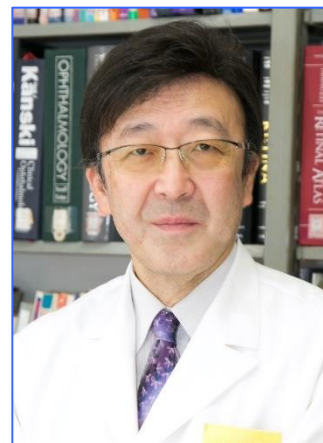


熊本大学産婦人科分子腫瘍研
(本原剛志講師)

長期計画委員会



小路武彦委員長



北岡 隆副委員長



柴田恭明幹事

委員長 小路武彦

副委員長 北岡 隆

幹 事 柴田恭明

委 員 大野伸彦, 鳥村拓司, 永田浩一, 奈須家栄, 原田 大

本学会創立当初より編成された委員会で、その任務は長期計画を策定し、その実質審議を関連する他の常置委員会に付託することである。すなわち、学会の将来構想を議論し、実効的な施策を提案することが求められている。

委員会の経緯

1968年の発足時には橋本正淑理事（札幌医科大学産婦人科）ならびに榎木勇理事（関西医科大学産婦人科）によって担当された。過去20年間は、緒方卓郎理事（高知医科大学外科：1998年～1999年）、野澤志朗理事（慶應義塾大学産婦人科：2000年～2002年）、石原得博理事（山口大学病理：2003年～2008年）、2009年からは小路武彦理事が務めている。

現在の活動

実際の活動として、会員全員に学会の活性化に向けたアンケートを実施し、若手会員の減少への危惧から特に学術集会のシンポジウムの有り方や他学会との連携の促進し、国際化および機関誌MMM誌の積極的な活用を強く提言してきた。さらに最近では、学術集会での企業の研究者と連携したシンポジウムの開催、研究活動の様々な問題を共有するための「Help me corner」の設置、学会内外を問わぬ新評議員の就任等を推し進めている。

日本臨床分子形態学会は、理事会に設置されている6つの委員会のそれぞれが独立して幹事長・幹事と伴に運営しつつ、学会として衆議一決する体制が整っています。

本学会の会員数が5百名となった現在、専門医制度にもガイドライン作成にも関わらないこの学会は、多岐亡羊の感のある現代において、基本理念である「基礎と臨床を両輪とした医学の発展に寄与すること」を愚直に堅持し、今もなお医学の起点となる「形態学」の一文字をキーワードとすることこそが次の半世紀に約束された展望です。

医師であり明治・大正期の政治家であった後藤新平が、「金を残して死ぬ者は下、仕事を残して死ぬ者は中、人を残して死ぬ者は上」の言葉を残しています。次世代の本学会を託す若い世代の研究者が自ずと集い育っていくことこそ本学会の方向性です。

私たちのこの日々の地道な活動の中で、「君子三楽」を目指し、次世代への確実なバトンタッチを実現させることが最大の責務と考えます。

私の履歴と日本臨床分子形態学会

1982年 1984年

1993年

2004年

2019年

熊本大学

研修医

医員 助手

講師 助教授 教授

1984年~1988年

大学院

熊本大学病理学教室
(高橋 潔教授)

1993年~1995年

Post-doctoral Research Fellow
Johns Hopkins University
Department of Pathology
(Professor R.J. Kurman)

1985年

第17回日本臨床電子顕微鏡学会
最初の全国学会発表

1990年

評議員

2008年

理事

2011年

常任理事

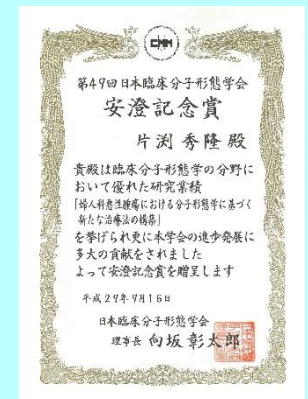
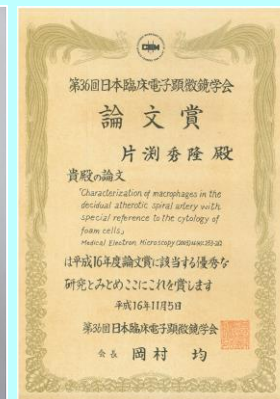
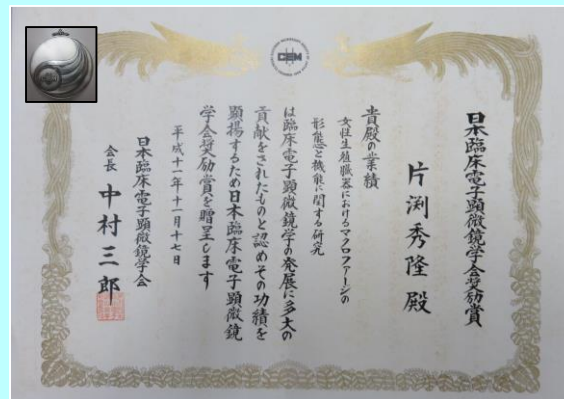
2017年 2018年

副理事長 理事長

1999年

2004年

2018年



形態学は絵画や造形の世界に通じる「アート」の要素を持ち合わせ、観察する者によって見え方や感じ方が変わり、表現型としてのかたちという普遍性がある一方で主観的との評価を下されることもあります。しかし、「アート」の心はみえるかたちの常識を越え、分子の世界に示唆を与え、新たな「サイエンス」を生み出します。

形態学を基本として、日々の臨床、研究、そして教育を行ってきたこの38年間に矜恃をもって、形態学は素晴らしいと断言します。

初春の令月にして 氣淑く風和らぎ 梅は鏡前の粉を披き 蘭は珮後の香を薰す



坂本八幡神社と太宰府都府楼跡（2019年8月17日）

ご参加の皆様のご清聴に心よりお礼申し上げます。

熊本城